
けいおん！～軽音部で旅行？～

九樹林ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜軽音部で旅行？〜

【Nコード】

N01021

【作者名】

九樹林ツバサ

【あらすじ】

「みんなでどこか行かないか？」漣の言葉から始まった年末旅行。そこで決まった行き先とは？けいおん！をサイドストーリー風にしてみました。

#1 旅行!

「唯!もっと速く走れ!飛行機に遅れるぞ!?」

「唯センパイ、走ってくださいーい!」

ここは関西国際空港。流石は年末、というところだろうか。年越しを海外で過ごす旅行者でひしめいている。

その中に埋もれた女子の声が周りの雑音を掻き分け、僅かに聞こえる。

「ゆいちゃん、がんばって!!」

こちらからも、唯という人物を呼ぶ声が聞こえる。

さて、呼ばれている張本人なのだが。

「あ~~~~、まってえ~~~~」

「おねーちゃん、大丈夫っ?」

「う~~~~、まってえ~~~~」

顔がよく似た2人が少し距離を置いて人混みを進んで行く。・・・いや、姉が人に吞まれている。段々と妹との距離が開いていく。

「あ、あ~~~~れえ~~~~」

出国ゲートへと向かうはずが、このままでは一人空港の入り口へ逆戻り。

そこに、こんな言葉が流浪少女の耳に飛び込んできた。

「ゆーっいつ、常夏のハワイが夢の彼方にきえてくぞおーっつっ
！！」

カチューシャをした少女の言葉だ。

この少女たちはハワイで年越しをする予定らしい。しかし、このままでは飛行機に乗れず、日本での年越しとなるだろう。むしろ、その可能性が高い。

原因は見ての通り、流浪少女こと唯である。人の流れに逆らって進んで来たせいか、流れに身を任せる程の体力しか残って

「りっちゃん、あたしガンバル！うおりゃーっ！！！」

・・・あつたんだ、体力。

先程とはうって変わって、唯は猛烈なスピードで出国ゲートへと向かっている。

人混みを海に例えるなら、唯はサメ。獲物はただ一つ。ANA752便9・56発ハワイ行きだ。

唯は出国ゲートへ姿を消した。

#1 旅行！（後書き）

初めまして、九樹林ツバサです。
初めての執筆なので、皆さんの感想、意見を是非聞かせて下さい。
今後の参考にさせていただきます。

#2 回想！（前編）

事の発端は2週間前に遡る。

私立桜ヶ丘高校の音楽室を部室とする軽音部が今日も部活動をしていた。

とは言っても、クリスマスコンサートも何もなく、年末を迎え撃つだけ。ならば、活動内容も自ずと決まってこよう。結果、ヒマだから喋るのだ。

いつものように、紬がお茶とお菓子を持参してくれメンバーは食べるという構図が展開されていた。

「しかし、ヒマだねえ。」

「そんなこと言うヒマあったら、練習しようよ、律センパイ。」

「まあまあ、お茶、入りましたし、ね？」

「わあは〜！今日のおやつはシフォンケーキだあ〜！！」

「唯センパイ・・・」

「あら、これ。パテシエルの新商品じゃない？売り切れしまくって、なかなか買えないんじゃないかなかったっけ？」

「・・・っ!?!? さわ子先生!?!? いつの間に?」

梓の疑問を軽くスルーし、紬に問いかける。

「あ、はい! あそこ、ウチの父の父の御友人が経営なさっていて、人数分確保してもらったんです。」

流石は琴吹家。富豪は顔も広い。

「もう、滯センパイからも何か言ってください!」

助け舟を求める梓だったが。

「・・・・・・」

滯は何か考え込んでいる。

「・・・滯センパイ?」

「あっ、ごめん、何?」

「どーしたの、滯ちゃん?」

フォークを口に咥えた唯が、興味深そうに尋ねる。

「いや、その・・・冬休み、なんだけど、みんなでどこか行かないか?」

#3 回想！（中編）

「いや、その・・・冬休み、なんだけど、みんなでどこか行かないか？」

「・・・？」

滯を除く全員が不思議そうに滯を見る。

それもそのはず、通常の合宿ならば、それをハッキリと明言する滯なのだが、そういう訳ではない。なんとも曖昧な言葉を滯が言うのも珍しい。

続けて、滯が言う。

「私たち、来年は高3だ。受験前の長期休みも冬休みと春休みだけだろ？春休みは新年度の準備で忙しくなるだろうから、この際記念に旅行にでも、と思ってな。」

「滯もたまにはイイコト言うじゃん♪」

「旅行かぁ。いいねえ〜。」

「それも良いですね。ミンナで行きましょう！」

律、唯、紬の3人は興味を抱く。

「・・・そうですね。センパイたちは、これから休みじゃない休みが始まるんですね。」

梓も渋々同意する。

「あたしわぁ、おおみそかぁ、いそがしいからぁ、行けないわぁ&#9835;」

さわちゃん先生が猫撫で声で返事するが、誰も相手にしない。元から旅行メンバーには入っていないのだ。

「じゃ、決まりだな。行く先はどうしようか？」

「あ・・・ちょ、待っ」

「んん、京都とか？」

「唯、京都で年越してどーする？何かこう、パツとするトコいこーぜ。」

「そう言う律はどこに行く気？」

「ねえ、理由くらい聞いてく」

「そだなぁ、ここは豪勢に海外とかじゃん！」

「バカ！費用を考えろ！私たちは高校生なんだぞ！？」

「じゃあ、滞はどうなんだよ？」

「え、それは・・・沖縄、とか？」

「それ、中学の修学旅行で行ったろ？だったら、そこはかいが」

「理由聞けつつってんだろーーーー！！！！」

さわ子先生、ヤンキーモードへと変貌を遂げる。

生徒5人は顔が凍りつくも、震源地から避難するためズリズリと移動する。滞に至っては涙目だ。

「聞かないの！？アーン!?」

「えと、ど、ど、どうしてさわ、さわちゃん先生様は同行され、されな、ないんでしょうか？」

席に1番近い唯が声を裏返して尋ねる。

すると再び猫撫で声で、

「それはねえ、合コンがあるのよぉ♪」

『へ、へえ……』

一同、返答はしておく。何とも反応がし難い内容だ。

「で、その合コンなんだけどね、大学の時の友達に誘われちゃって。あァン、困っちゃうわ。人気独り占めだったらどしよ」

「あのう、そのお友達って男ですか？それとも女ですか？」
再び唯が尋ねる。

「男性よ。」

おおっ、と場がどよめく。

「どんな誘われ方したの、さわちゃんは？」

律がニヤけながら質問を重ねる。

「合コンのメンバーが足りないから、お前ちよつと出てくれない？
って。お前ならカワイイから、注目の的だよって。きゃ〜」

梓が物珍しそうに聞く。

「へえ、合コンって社会人になってもあるんですね。」

「そりゃそうよ。私なんか大学の友達からバンバン誘いが来るもの。
人が足りないんだ〜、お前しかないんだ〜って。」

「すごいです、さわ子先生！」

素直に感心しているのは紬だけで、他はさわ子先生の現状をしつかりと把握した。

「あつ、もうこんな時間。それじゃ、先生は先に帰るわね。」

自分の主張を言い終えて満足したのか、時計に目を向け部室を鼻歌交じりに後にした。

「で、どーすんだ、旅行先？」

『・・・・』

意見が出ない。が。

「ええと、いいですか？」

ピンチヒッター・紬が手を上げる。

夏の合宿も、元を辿れば紬のお陰なのだ。お嬢様が軽音部にいたからこそ、成立したのだ。

その紬が何を口にするか、全員が固唾を飲んで見守る。

「私の叔父が実は海外に住んでいて、その家が広いから頼めば泊めてくれるかもしれないの。」

『……』

一同、声も出ない。

やはり住む世界が違うのだ、と。

「そこって一体どこなんだ？」

滯りが気になる点を突く。

「ハワイです！」

この後、部室が爆発したように騒がしくなり、下の階を偶然通りかかった教師に負けんばかりに怒鳴られたのはまた別の話。

#4 回想！（後編）

出国当日。

正月の帰省ラッシュを考慮に入れ、少し早めの朝7…30に紬の家に集合し空港へ出発、という日程だったがこれが大幅に遅れることとなる。

原因は何てことはない、ある人物である。

平沢家6…00

憂が起きる時間だ。ピピピッと主人に自己主張する目覚し時計を止めて、ベッドからゴソゴソと出てくる憂。

「ううつ、寒う・・・」

こんな時期でさえ、定刻通りに起きるのも憂らしい。

彼女は家を空けることが多い両親に代わって家事をこなす。

トントン、と小刻みな包丁の音が1階から聞こえてくる。

「さて、と。」

平沢家6…45

今度は妹と違ってぐうたらな姉、唯が起きる時間だ。

唯の部屋でも目覚しが自己主張し始めていた。それを布団から生えてきた右手が止める。

「・・・ZZZ」

「おねーちゃん、起きないと飛行機におくれるよー？」

流石は憂。既に姉の部屋でスタンバっていた。姉が目覚し時計を止めることは予測済みだったのだ。

「う・・・あと5分。」

「そんなこと言っていると、ハワイに行けなくなっちゃうよ?」

少し間が空き、ガバツと唯が布団から飛び出す。

「そ・・・そだった!」

役目を果たし終えた憂は1階に戻り食卓の準備をする。
しばらくし、唯も身仕度を整える。

2人で朝食を取り、後片づけをし、後は出発というだけなのだが。

「あ・・・ムギちゃんち、どこだっけ?」

肝心な集合場所が分からないのだ。このとき平沢家7..20
考えてみれば、滯と紬の家には1度も遊びに行ったことが無い。むしろ頭の中はすっかりハワイアンになっていた唯に、他の用件を考える余裕など無かった。事実、昨日の準備にしても

「おねーちゃん、着替え入れた?」

「・・・」

「おねーちゃん?」

「・・・う、へ？」

「着替え入れた？」

「う、うん。入れたよ、多分。」

「洗面用具は？」

「・・・ハワイかあ。やっぱフラダンスとか踊って、あ、ウクレレってギターと同じかな。でもポロンポロンって感じだからなあー。ギター弾きたくなるかなあー。でも持つて行くの大変だし・・・。うーん、持つて行くか、置いて行くか、それが問題だ、ウン。」

「お、おねーちゃん・・・」

憂に色々と指摘されながらキャリーバッグに荷物を詰め込んだのだ。その憂でも、流石に姉の頭の中の忘れ物には気付かない。

取り合えず家を飛び出し、紬のケータイに電話をかけて案内を頼む。

「む、ムギちゃん、マ〇ク過ぎたよ！」

「そしたら、次の信号を左に曲がって！」

「ら、ラジャー！」

紬の家は思ったより遠く、走っていた唯、憂は息切れし、足を止めてしまう。顔に当たる風が痛い程に冷たく、吐息も白い煙となって目に見える。

そして最終的な出発は8・・・00過ぎとなり、更に皮肉なことに正月の帰省ラッシュによる渋滞にぶつかかった。

そして今に至るといふわけだ。

#5 出発！（前編）

さて、出国ゲートに到着したのはいいものの、次の関門が立ち上がる。

持ち物検査である。一度に処理できる人数が限られるため、ラッシュ時には長蛇の列となる。

桜ヶ丘高校軽音部も例外ではなく、年末の出国ラッシュに巻き込まれた。

「うわー・・・間に合うのか、コレ？」

律が物憂げな顔で列を見る。

「仕方がない。並ぼう。」

澪が促す。

唯は責任を感じたのか、うつむく。

「ごめんね、私がちゃんとムギちゃんち調べとけば良かったのに・・・」

「気にするな。どうしたって渋滞で遅れてたさ。」

「澪ちゃん・・・」

澪が唯に笑いかけ、唯の顔に明るさが戻った。

どうこうしている間に唯たちは金属探知ゲート目前となる。

貴金属類をトレーに置き、手荷物を一時、係員に預ける。最初にゲ

ートから出て来たのは紬だ。続いて滯も出て来る。律もゲートを潜り抜けて、

ビーツ

鳴った。

「あ、イケねイケね。」

と、律はパーカーのポケットからケータイを取り出す。

「何やってんだ、あいつ・・・」

滯は溜息、紬は苦笑いだ。

その後、律は無事に通過し、唯、憂も合流する。唯は、そこで気付いた疑問を律に投げかける。

「ん？アズにゃんは？」

「そういえば・・・」

周辺に梓の姿が無い。

その疑問には憂が答える。

「梓ちゃんなら、そのゲートで止められています・・・」

そこには、何度ゲートを通っても警告音の鳴る梓がいた。

「え、何で……何で!？」

かなり焦っている。

前方には先輩たちと憂が見え、自分ひとり取り残された気分だ。

「恥ずかしい……」

女性の係員から、少々お待ちくださいと声をかけられ、金属探知棒による身体検査が始まる。

何事だ、と周辺の人々も梓に目を向け、ただでさえ紅かった梓の頬がますます紅潮した。

目をギュッと閉じて、検査の終了を待つ。

金属探知棒が梓の腕、胸、背中、そして足へと向かい始めたときだ。

ビーツ

「あー、コレですねー。」

「……?」

そつと目を開けると金属探知棒は腰の位置で反応している。

それはスカートに付けたファッションベルトの留め具だった。

原因が分かり一時はホッとするも、ある事に気付いて涙目ながらに訴える。

「は、外さないと、ダメ、ですか？」

頭の中に変なイメージが広がって行く。係員が無理矢理ベルトを外したら……

「さ、さ&-----!..」

#6 出発! (中編)

「い、いやー！ー！ー！」

「いえ、別に構いませんよ。」

「へっ？今、何て・・・？」

「だから、外さなくて構いませんよ。」

「よ、良かった・・・」

一気に安堵の色が広がる梓。

念のため、ということでも検査をするが異常が無かったためベルトが原因と断定されて通行が許可された。

「アズにゃん、お疲れえー。」

「は・・・はい。」

「ぶはははっ。いやあ、でも災難だったなあ、梓も。でも、まさか梓が、ハハハッ。」

「・・・笑い事じゃないですよ、律センパイ。」

律に笑われ、梓は顔を再び赤くして俯く。

「でも、アズにゃんの慌てた顔、面白かったなあ。」

「ですね。ふふふっ」

紬が同感、とばかりに笑う。

「さて、全員そろったし、そろそろ行く」

か、と滯が言おうとして動きが止まる。目が右腕に付けた腕時計に焦点を合わせたままだ。

「どしたの、滯ちゃん？」

唯の声に誘われ、他のメンバーも疑問符が浮かぶ。その答えは、どこからともなく流れてきた。

「京都府からお越しの、琴吹紬様、田井中律様、秋山滯様、平沢唯様、平沢憂様、中野梓様。飛行機が発の御時間でございます。いらっしゃいましたら、至急16番搭乗口までお越し下さい。」

滯以外の全員が各々で時間を確認する。

短針は9、長針は56を指していた。出発時刻だ。

「は、は、走れえー！ーっ！っ！」

我に返った滯は他の旅行者が驚く程の大声をあげ、全員が一気に走り出す。

で、唯がまた遅れを取る。

「はあ、はあ・・・ね、ねえ、まってよお。」

「リゾートがエスケープするぞ、唯！」

「う、うん。が・・・ガンバる。」

律のストレッチなワードにエネルギーをギブされ、唯のレッグズにパワーがインする。

間もなくして、ドタバタと搭乗口に到着した。

#7 出発！（後編）

「す、すいません、遅れましたあ・・・」

「お急ぎの所誠に申し訳ございませんが、搭乗券を御提示頂いて宜しいでしょうか。」

搭乗口のお姉さんに言われて、各人、搭乗券を取り出す。

「え、あ・・・あれ？」

唯が慌てだす。

「唯、まさか・・・」

律の頭に嫌な展開が広がる。

「お、おねえーちゃん。私がつってるよっ！」

「あ、そうだった・・・」

改めて、しっかりした妹に一同感心する。

こうして何とかハワイ行752便に乗った。

荷物を頭上のスペースに片付けながら、律が唯に言う。

「いやあ、ギリギリセーフだったなあ、唯？」

「うん、一時はどうなることかと思ったよお」

いや、全然セーフなどではない。既に出発時刻を10分以上オーバーしている。その影響で他の便も多少遅れが出ているのだ。本人たちは勿論知ったこっちゃないが。

唯たちが座席に着いてからベルト着用のランプが赤く光る。

更に、前の座席に埋め込まれた画面に飛行機の前方が映し出される。そして飛行機は滑走路へと到着し、両翼のジェットエンジンにブーストが掛かる。

ひつ、と微かな声が紬の耳に入り、紬が隣を見る。

「コワクナイ、コワクナイ、コワクナイ、コワクナイ、
コワクナイ、コワクナイ、コワクナイ、コワクナイ、
コワ」

「・・・漣ちゃん、大丈夫だよ。私もみんなもちちゃんと居るし。ね」

「う・・・うん。」

「突然エンジンが故障、緊急ランプ点灯、機内騒然。」

「うわああーっ！」

「もう、律ちゃん！」

漣の後部座席で律が煽るのを、紬が諫める。

滯は既に意識を失っていた。

「あれ？ 濤、おい。みーおい。」

「律ちゃんが脅すから・・・」

「悪い悪い。滞、だいじょーぶかー？おーい、み・・・うわっ。」

律が座席にバンツと叩きつけられる。飛行機が離陸体勢に入ったのだ。

体に強いGが後ろへとかかる。

何を思ったのか、唯が突然律の方へ目を向ける。

「り、律機長！ダメです、操縦が利きません！」

「クソッ！どうしてこんなときに限ってエンジントラブルなんだ・・・」

律が頭を垂れる。

すると、唯が律の肩を掴み励ます。

「まだ・・・まだ終わった訳じゃありません！まだ私達で何か出来るはずです。」

「そうだな、唯副操縦士。ようし、もう一度、もう一度だ。スロットルをあげ」

「少し・・・頭冷やそうか」

『へ？』

唯と律が前を見ると、意識が戻った滞が、未だ飛行機が上昇中であるにも関わらずシートベルトを外し、座席に膝立ちして2人を凝視していた。目を光らせて。

刹那、パカアーンと乾いた音が響き、律が頭を押さえていた。

「お前は余計なこと言うな！ハワイに着くまで、ずっと変な事考え
てしまっじゃないか！この機内に長時間閉じ込められる身にもなっ
てみる！」

既にその身になっている律。

「み、濡ちゃん、し、シートベルトして！危ないから！」

紬が濡の気をなだめ、なんとか濡は座席に座る。

「いや、だから悪かったって。すまん、この通り。」

濡からは見えないが、後ろからパシッという音が聞こえた。合掌し
たのだろう。

「まったく・・・」

これで許してくれるところが濡らしい。

その後も4人は客室乗務員のお姉さんに注意されるまで、ガヤガヤ
と騒いでいた。

「今日も平和だね、軽音部は。」

「そ、・・・それはどうだろ」

4人と通路を挟んで反対の席で、憂と梓の1年コンビがその光景を
眺めていた。

#8機内！（前編）

う、うーんっ……ここは？

家、だ。でも、ボロじゃん……

うわぁ……あれがキッチン？すごく黒い。

っ！？何この臭い！腐った臭いどころじゃないっ！

流しからだ……うっ！？黄緑色に淀んでるう。底無し沼？

私がこんな汚い所にどうして？

確か、飛行機に乗ってから……あれ、どーしたんだっけ？思い出せない……。

「おーいつ、アズニャンコ。」

うん？唯先輩の声だ。

「唯せんぱー—————」

いつ！？え、格好が、格好が！！

「ゆ、唯先輩！どうしてそんな格好をしてるんですか！！」

何でファミコンで出て来そうな古装備の勇者になってるんですか！？

「あれ、アズニャンコ。どーしたの、そんなに興奮して？あ、分かった！私が帰ってきて嬉しィんだ☆いや、それならそうと言ってくれればいいのにィ。」

「違います!」

「じゃあ、とうとうお相手を見つけて————」

「そんなんじゃないですね!第一、アズにゃんならまだしも、アズニャンコってなんですか!」

「だってアズニャンコはアズニャンコだもん。」

「意味が分かりま……え!」

わ、私の格好も変わってる!?

え、ええ!?!猫耳が、と、取れない!?!体も毛でもじゃもじゃ……何で……っ!?

「どーしたのアズニャンコ?今度は頭抱えちゃって。あ、喜びを体で表現してるんだ!」

「……いえ、もういいです。」

落ち着け、私。何か、何かがおかしくなってる。そ、そうだ!夢だ!これは夢なんだ!

「アズニャンコ、何言ってるの。夢なんかじゃないよ?」

「え!?!私の考えてる事がどーして分かるんですか!」

「だって、私とアズニャンコの仲だもん。」

「いや、そんなことですか!？」

「そうだよ？」

いや、そこを肯定されると困るんですけど・・・

「さあ、旅に出ようか、アズニャンコ！」

「とっ、突然!？」

「えー、前から言ってたじゃん。魔王退治頼まれたから今度の休みに行くよって。」

「そんな聞いてませんよ!？って言うか、そのちよつと買い物行ってくる的なノリは何ですか!？誰からそんな依頼引き受けたんですか!？」

まさかこの国の王様? 唯先輩なんかに? でも、一応勇者の格好してるし、ありえないわけじゃないか。だとしたら・・・

「え? 行きつけの八百屋さんからだけど?」

・・・ダメだ、展開が読めない。

「魔王が野菜をマけてマけてって結構うるさいんだって。迷惑だよねェ。」

「魔王が八百屋に来てるんですか!？しかもそんな理由で退治していくんですか!？」

「だって、断れなかったんだもん。」

絶対に将来詐欺に引っかかる、このヒト。

「八百屋来たところで狙えば良くありません？」

「それじゃあ近所迷惑だよ。」

「は？」

「だって騒音ヒドくなると思うよ。」

「気にするんですか、魔王退治で？」

「御近所付き合いは大事だよ。」

「・・・・・・」

何も言わない方が良いみたい。これ以上言ったら、私がおかしくなりそう・・・

「よっし、それじゃ行こ☆」

こんなので、大丈夫なのかな・・・

#9 機内! (中編)

「そういえば、あの汚れた家は一体なんですか? キッチンがカオスなことになってましたけど。」

「あっ、ごつめーん。メンドくさくて・・・」

「そんなメンドくさいと言えるレベルじゃありませんでしたよ! ? 水が腐って、悪臭がしてたんですから!」

「最近コンビニで食事を済ませちゃってるからね。」

「・・・この世界にコンビニがあるんですね。」

「うん。でも、最近マカシン読んでなかった・・・ね、次のコンビニで寄っていい?」

「ダメです! 魔王倒しに行くんですよ? もたもたしているヒマはありません!」

「ええー、ケチいー。」

「子供ですか!」

「まだ17歳だもーん。」

うう、手に負えない。

こんな時、憂ちゃんがいればなあ。

「呼んだ、梓ちゃん？」

「っ！？憂ちゃん！？」

そんな簡単に出て来るの！？

「あー、またお姉ちゃんか・・・」

「あーっ、憂いっ♪」

「ダメだよ、お姉ちゃん。憂ちゃんを困らせたなら。」

「だって、可愛いんだもん。萌え要素充分だよ？」

「それでもダメ！人様に迷惑かけるのは絶対ダメ！」

「アズニャンコはネコだよ？」

ネコじゃないですっ！

「あ・・・そうか。」

え、そこで納得！？

「それでもやっぱりダメだよ。ネコが相手でも。」

「はあい・・・」

ねえ、憂ちゃん。庇ってくれるのは嬉しいんだけど、私の扱いヒドくない！？

「それじゃ、私行くね。」

「えー、もう憂行っちゃうの？」

「そうだよ、もっといてくれた方が私も行動しやすいし。」

「お姉ちゃんが梓ちゃんに迷惑かけてるから、わざわざ魔王の城から来たんだよ？」

『えっ！？』

「最後の最後に驚かせようと思ったのに・・・お姉ちゃんがいけないんだよ？」

「そ、それはゴメンナサイ。」

そこが問題じゃありません！

「ねえ、どうして憂ちゃんが魔王の城にいるの？」

「私が魔王の右腕になって、魔王の前座としてお姉ちゃんたちとた闘うんだ♪」

「それは手強い・・・じゃなくって！先にネタバラしてどうするの！？」

「そしたら、対策を立てやすいでしょ？」

魔王の右腕、優しい・・・

「うおっしゃ、頑張って憂を倒すからね！」

「うん、お姉ちゃん頑張って！待ってるよ♪」

敵を応援していいの！？

「そういえばさ、憂。ここから魔王の城までどれくらい？」

「えーっと、ざっと680ラズバンくらいかな。」

ら、ラズバン？それ、どういう単位？

「遠いねえ。でも、よくそんなところからすぐに来れたね？」

「だって、魔王の右腕だもん☆」

「そっかあ。」

そっかあ、じゃありませんって！

「じゃあね、頑張って。」

って、林の中に入って行くの！？

「あー、憂行っちゃった。」

「茂みに入っただけですけど・・・」

「そしたら、張り切って行こー！」

「はあ・・・」

結局、何だったんだろう？

#10機内！（後編）

「ねえ、アズニャンコ。」

「どうしたんですか？」

「旅するの、メンドくさくない？」

「早速ですか！？あの家から出て、20分も経ってませんよ！？」

「だって、これからずっと歩くんだよ？」

「この依頼を引き受けたのは唯先輩です！！最後までちゃんとして下さい！」

「メンドいよぉ。」

「……」

もう、知らないっ！

「あ、そうだ。チート使お♪」

「ち、チート！？データを改造するんですか！？」

「そうしたら、魔王の城もあつという間だよ☆」

「って、コントローラー！？どうしてそんなものが荷物に……」

これ、ゲームだったんだ・・・

「→→←←R1L1R2L2START!」

「何も、変わってなさそうですね・・・」

「え？変わってるよ？ほらうしろ。」

「？」

な・・・!?

お城が、目の前にある!?

「これが魔王の城を呼び寄せるチート。」

「私達がお城まで飛ぶんじゃないんですか!？」

「それもあるけど、」

あるんだ・・・

「コレで良くない☆」

「・・・イイですよ、もう。」

「そしたら、Let's GO!」

「武器もないのに！？先輩は剣があるからいいですけど、私は何も
ないんです！！」

「ほら、そんな細かいコト言っていると時間が無くなっちゃうよ？T
ime伊豆moneyだよ。」

「何か綴りがおかしくありません？」

「気にしたら負け。」

「……はあ。」

「お邪魔します。」

入っても、だーれもない。

目の前には、いかにもって感じの赤絨毯を敷いた階段があるけど、
それよりもお城なのに玄関で靴脱を脱いでる唯先輩は……

「靴は脱がなくていいんですよ？」

「あつ、そうなの？てっきりウチと同じかと。」

「あのウチに玄関らしきモノさえありませんでしたよ！？」

「ありゃ、バレだ？」

頭痛い……

「ふはははっ、良く来た愚民ども！」

あれ、この声って？

「だ、だだだ、誰だっ！ででで、出てこごごっご、こーいっ！」

唯先輩、ビビりまくってる・・・

「言われなくても、出て来てやるよ！」

あ、やっぱり律先輩だ。

「りっちゃん！？」

「唯！？唯なのか？」

「そうだよ・・・唯だよ、りっちゃん・・・」

「ユイっ！」

「りっちゃん！」

え、なにこのシチュエーション。

「久しぶりっ！！」

「ホント、何年会ってないっけ？」

「昨日会ったばかりじゃん。」

「あはっ、分かった？」

は！？昨日会ったばかりで、このシチュ！？

「ほら、アズニャンコも一緒だよ。ご挨拶して。」

「いや、ちょっと律先輩！どーして魔王役なんかしてるんですか！？」

「いやあ、そう言われても、魔王は魔王だからなあー。」

「訳分かりませんよ！」

「あ、そうだった。りっちゃん、私達、りっちゃんを倒さないといけないの。」

「私を？どーして？」

「……どーしてだろ？」

「依頼を受けたんでしょ！！自分で言ったじゃないですか！？」

「あー、そうだった。……でも、どーでもいいや☆」

「そうそう、どーでもよくね♪」

「よくなーーいっ！！」

はあはあはあ……なんで私が疲れなきゃいけないの？

「そういや、唯の妹見てね？」

「え？さつき会いまし————あっ！」

「どした？」

お城をこっちに持って来ちゃったから、憂ちゃんは多分、元のお城があった所に・・・

「ちょっと！」

っ！？だ、誰！？

「み、滞ちゃん！？」

「こっちもいるわよ！」

「む、ムギ！」

「先輩たち、どーして？」

「唯が余計なことをするからだ！」

「よ、余計なことって、私、何もして・・・あ。」

「そうよ、唯ちゃん。唯ちゃんがチートを使ったせいで、本来途中で出て来る私達と合流しなくなってしまったの。」

「せ、先輩たちも違う格好なんですネ・・・」

「私は魔法使い。ムギはシーフだ。」

「あ、それっぽいですね。」

滯先輩はローブ着てるし、紬先輩はラフな服装だし。

「そして、どう説明する気だ、唯？これでメンドくさかったからとか言ったら――――」

「ちょ、ちょーっとなまって！今から理由考えるから！」

自分で自分を追い詰めてどーするんですか！？

「ほほう、やっぱりそうだったか。」

「まあ滯、落ち着け、な？ほ、ほらさ、お城を巨人が運んだ可能性もあるじゃん？」

「りっちゃん、モンスター辞典によると巨人の生息地は遙か北だよ？」

「唯、お前が言うなあーっ！フォローが台無しだあーっ！」

「・・・もういい。この手で始末をつけるから。」

『ひっ！？』

滯先輩！？

「そこら中から光が溢れて来る・・・！」

「うわ、眩しくて何も見えねえ。」

「滯先輩、コレってまさか!？」

「ア○テーマ!」

「そんな最強魔法使うなあーっ!」

「うわーーーーっ!」

「梓ちゃん、どうしたの!？」

「・・・う、ここは?」

「飛行機の中だよ?」

「あ・・・なんだ、やっぱり夢だったんだ。」

「凄くうなされてたみたいだけど、大丈夫?」

「な、
なんとかね。」

先輩たちは・・・爆睡してるし。

「ごめ、ごめんってば……. 濤ちゃん、殺さないでえ……. Z Z」

「た・・・おす・・・Z
Z Z」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102i/>

けいおん！～軽音部で旅行？～

2010年10月10日08時46分発行